

フリードリヒ二世の十字軍

花田 宇秋

昨年アメリカブッシュ大統領による「十字軍」発言で「十字軍」は不死鳥のように蘇った感がある。ローマ教皇ヨハネ＝パウロ二世が、過去の「十字軍」を自省し、イスラム側との対話と呼びかけ自らもダマスクスのウマイヤ・モスクを表敬訪問したことが、まだ私たちの記憶に鮮やかであったというのに。西欧キリスト教世界の“負”の遺産「十字軍」が清算されるのはいつの日になるのだろうか。おそらくその日はパレスティナ問題が解決される時であろう。

ところで、そのパレスティナ問題が難問である所以の一つは、周知のようにエルサレムにユダヤ教・キリスト教・イスラム教の各聖地が混在していることである。三宗教が共存共栄していくためにはエルサレムがいずれの宗教の政権下にあろうとも、それぞれの宗徒による各聖地の管理と訪問の自由が保障されなくてはならないであろう。この聖地問題を含むパレスティナ問題を考えるとき、一際光彩を放つのが約八百年前のフリードリヒ二世による第五回十字軍と彼のエルサレム滞在時の言行である。

神聖ローマ皇帝にしてシチリア王フリードリヒ（フェデリーコ）二世（1195-1250）は、ハインリヒ六世を父に、ノルマン・シチリア王ロジェ（ルッジェーロ）二世の息女コンスタンツァを母としてイスラム文明の花の香り漂うシチリアに生を享けた。幼時よりイスラムに接していたため西欧キリスト教徒のようにイスラムとの違和感を強く意識することはなかった。アラビア語を自由に話し、イスラムの学芸万般に造詣が深かった。

その彼が教皇グレゴリウス九世により破門されながら敢行したのが有名な第五回十字軍（1228-29年）である。1228年6月28日、アドリア海に臨む南イタリアの港湾都市プリ

ンデシを出船した彼は、波静かな地中海を南東に進み、クレタ島及びロードス島を經由した後、シリアの港はアッコン（アークル）に11月に到着上陸した。エルサレム入城に関して敵王アイユーブ朝スルタン・カーミルと再三の交渉の末、翌29年3月同市に無血入城した。以下がイスラムの歴史家イブン・ワースィル（1298年没）が伝える（『アイユーブ朝史』）フリードリヒ二世の言行の一つである。

皇帝はエルサレム内の様々の聖地を訪れた後、アクサー・モスク（イスラムの聖域の一つ）に到り、このモスクを（キリスト教徒であるにもかかわらず）嘆賞した。ミフラブ（壁がん）の美を誉めそやし、ミナレット（尖塔）に上ってやがて降りた。その時アクサー・モスクに新約聖書を小脇にはさんで入って行く（キリスト教徒の）神父をみとめるや、これ呼んで次のように叱った。「神かけて何を汝は持ってこのイスラムの聖殿に入ろうとするのか！汝らが（主権者がキリスト教徒の余であることをいいことに、イスラム教徒の）許可なくこれに入らんとするなら、余はその者の眼をくりぬくぞ！我らはこの地ではスルタン・カーミル殿の僕にして奴隷である！」（中略）

また皇帝の滞留中、当地の法官は皇帝がキリスト教徒であるのを慮ってアザーン^注の中止を命じた。翌日この法官に皇帝は言った。「夕べはアザーンが聞こえなかったようだが？」法官は答えた。「陛下にはお耳

ざわりと思ったものですから。」

すると皇帝は次のように返した。

「貴殿は誤っている。余のために貴殿は自分たちの儀礼や法や信仰を変えようとするのか！？もし貴殿が余の国に滞在したとしても、余は貴殿のために教会の鐘を鳴らすな」と命じはしない。

「郷に入っては郷に従へ」のフリードリヒによる異文化理解であった。

皇帝フリードリヒはスルタン・カーミルと次のような条約を結んだ。一つ、皇帝はエルサレムを保持するが城壁を再建しないこと。一つ、城壁外の所物はフランク人（キリスト教徒）には所属せずムスリム（イスラム教徒）の領主がそれらを管轄すること。一つ、エルサレムのイスラムの聖域（岩のドーム、アクサー・モスク）はムスリムの手に帰すこと及びエルサレムでのムスリムの信仰は保障されること、これらであった。

皇帝フリードリヒによる八百年前のエルサレムの国際都市化であった。フリードリヒのこのようなイスラムとムスリムへの寛容の故にムスリムは彼を《アルアンバラートル》（ジ・エンペラー）との尊称で呼んだ。

（はなだ なりあき 所員・一般教育部教授）

^注 イスラムの礼拝時にモスクのミナレットから周囲になされる人声による招呼。その内容が以下である。

アッラーは偉大なり（四回）

私はアッラーの他に神なしと証言する（二回）

私はムハンマドが神の使徒であることを証言する（二回）

いざや礼拝に来たれ（二回）

いざや安きに来たれ（二回）

アッラーは偉大なり（二回）

アッラーの他に神はない（一回）

この時のアザーンには「イエスはマリアの子にすぎない」との文言が付加されていたという。